

新設科目「保育内容・表現（総合）」における学びと課題

伊 達 由 実・村 田 夕 紀・原 祐 子

平成23年度の教育課程改訂に伴って、表現にかかわる子どもの育ちを促す保育内容を具体的に学ぶことを目標とした科目「保育内容・表現（総合）」を新設した。本稿は、授業終了時に学生が書いたワークシートの記述をもとに、この科目を通じての学生の「学び」について確認するとともに、次年度以降の授業改善課題について検討した。

キーワード：保育内容・表現、保育の表現技術、課題解決学習、学び

1. はじめに ー科目設置の背景と研究の目的ー

平成22年7月に実施された「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の一部改正¹⁾に伴って、本学保育科でも教育課程の改訂を行い、平成23年度よりその運用が始まった。その際、「保育内容・方法に関する科目」群における「保育内容演習」の一科目として「保育内容・表現（総合）」を新設した。

科目設置の意図は、保育現場での表現活動の実態に照らして、音楽表現、造形表現、身体表現を一体的な活動として体験することを通じて、「保育内容・表現」について総合的に学ぶ機会を提供することにあつた。

今回の改正では、従来「基礎技能」と呼ばれていたいわゆる音楽・美術・体育にかかわる保育実技科目の名称が「保育の表現技術」と改められた。「保育の表現技術」科目の目標として「保育の内容を理解し、子どもの遊びを豊かに展開するために必要な知識や技術を習得する」ことが掲げられており²⁾、表現技術科目群と「保育内容・表現」とが密接に関連していることを示している。名称変更の趣旨は「子どもの表現を広く捉え、子ども自らの経験や周囲の環境との関わりを様々な表現活動や遊びを通して展開していくことが重要であることを踏まえ」、「音楽表現、造形表現、身体表現、言語表現に関する表現技術を子どもや保育との関連で修得できるようにすることが必要」³⁾と述べられている。このことはすなわち、表現技術の習得によって学生の表現にかかわる感性を豊かにし、表現力・技術力の向上を図るとともに、そのことが最終的に「子どもの表現や豊かな感性の育ち」を引き出したり支えたりする保育に結びつくことが目指されなくてはならないことを意味している。

1) 「厚生労働省雇用機会均等・児童家庭局長通知」雇児発0722第5号 平成22年7月22号

2) 同上（別紙3）「教科目の教授内容」

3) 「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」p.7

以上のことを踏まえ、四天王寺大学短期大学部保育科における「保育内容・表現（総合）」の開講時期は短大2回生の最終学期である4セメスターとし、これまでの学修で培った「保育表現技術（音楽表現の技術、造形表現の技術、身体表現の技術）」を総合的に駆使しつつ、表現にかかわる子どもの育ちを促す保育内容を具体的に学ぶことを目標として授業計画を立てた。科目担当は、「保育の表現技術」科目群における音楽表現関連科目担当教員1名、造形表現関連科目担当教員1名、身体表現関連科目担当教員1名の合計3名がこれに当たった。

また、表現技術の総合的な学びを図るということから、学習方法として「グループワークによる課題解決型の学習法」を採用し、教員は学習活動の促進役（ファシリテーター）として指導に当たった。学生にとってはこれまでに培った学習の成果をグループワークの中でどう活かしていくかが問われる授業となった。

初めての取組みということで、教室や施設・設備の確保など授業実施上の様々な困難が生じたが、一方で、当初予定になかった保育園児（約60名）の参加を得ることができ、学生にとっても教員にとっても多くの学びをもたらしてくれる結果となった。

子どもの表現や豊かな感性の育ちを引き出し、支えることのできる保育技術を涵養するための授業やカリキュラムをどう作っていくかは、保育表現技術担当者に与えられた喫緊の課題である。この課題に向き合いつつ、次年度以降の授業計画やカリキュラム構築・評価の基礎的なデータをえることを目的に、本稿では最終授業時に学生が記入した「授業における学び」を振り返るワークシートの記述から、学生自身がどのような「学び」をこの授業から得たと考えているかを確認する。

2. 授業の概要と展開

(1) 授業の概要とねらい

①授業の概要は以下のとおりである。

科目名：保育内容・表現（総合）

対象学生：保育科2回生全員（125名）

授業担当：音楽表現関連科目担当教員1名、造形表現関連科目担当教員1名、身体表現関連科目担当教員1名の計3名

授業区分：幼稚園免許必修、保育士資格選択必修

実施期間：2012年9月～2013年1月（半期 90分×15回）

授業目標：5領域の総合的理解と保育実践力を養う『保育内容演習』の1つである。総合的に保育を展開していくための知識、技術、判断力を習得するため、子どもの発達を5領域から捉え、子ども理解を深めながら保育内容について具体的に学ぶ。特に本科目では、子どもの豊かな感性や表現する力を育てるための保育内容を具体的に学ぶ。また、保育者として必要な感性や表現力を養い、創造性を豊かにする。

②担当者のねらい

授業シラバスの提出は開講前年の11月、実際の開講の10カ月ほど前である。その時点では、

音楽・美術・体育の教員が協働して授業を作ることに意義がある、またそのようにして出来上がった授業は、学生にとっても実際の表現活動を知る上で有益であろう、との共通認識はあった。しかし、「音楽表現、造形表現、身体表現が盛り込まれた生活発表会を模擬的に実施させよう」という素案があったのみで、具体的にどのように授業内容を策定し学生の学びを促すかについて具体案を出せるまでには至らず、この状態は開講直前まで続いた。

難しいと感じられたのは、子どもの保育表現を引き出し育てたりするための援助をどういう活動によって学ばせることができるのかを明確にすることであった。例えば、生活発表展が、「学生の表現活動の発表」に終始してしまえば、「子どもの表現援助」につながらないのではないか、というような危惧である。

そのような中でも次の2点は、追求すべきねらいとして確認した。

i) 協働性の学びを促すこと

グループワークの重要性については、各担当者が共通して認識していた。本学独自の科目である「保育実践演習」⁴⁾においても、1回生での出前保育（20名程度のグループで近隣幼稚園・保育所に赴き、人形劇、ダンスなどを演じる取組み）を皮切りに、保育科全員での運動会の開催、1・2回生合同でのリズム表現遊びの創作、少人数グループでの子育て支援体験、などグループワークによる協働性の学びを継続して促してきた。それらは、保育現場の協働性を見通しての学びを促すねらいと、学生の対人関係力の涵養を目指す意図がある。最終 Semester での授業ということで、この授業では協働性の学びの総まとめを学生に求めた。

ii) 子どもの保育表現を引き出し支える力の養成

保育現場における表現の主体はあくまでも子どもである。学生が自分自身の表現技術や感性を磨くことは大切な学びだが、それが現場での子どもの表現援助に繋がらなければ意味がない。保育者が自分の感性を下敷きに子どもたちの表現を構想することはあるだろうが、ここではもっと具体的に、どのような援助や言葉掛けをすれば子どもが安心して自己の表現に打ち込めるかなど、子どもの表現を援助する保育者の具体的なあり方について学んでほしいと願った。また、子どもと保育者が「見せる・見せられる」「教える・教えられる」の関係だけではなく、共に表現の世界を作り出していける感性や創造性の重要性に気付き、それを自ら育てていけるような保育者として学生達意に巣立ってほしいという願いを込めて授業を構想した。

(2) 授業の展開

授業開始当初は影絵劇、ファッションショーを内容とする「生活発表会」を模擬的に開催することを計画していたが、2回目の授業時に、M保育園より、3、4、5歳児約60名が9回目授

4) 全保育科専任教員がTT方式で全学生を対象に「理論と実践が融合した保育実践力の養成」を目指して展開している本学独自の教育科目。平成20年度より開講。詳しくは「平成23年度『保育実践演習』研究報告書」(2012) 参照。

業時に参加してくれることが決定し、そこからプログラムを影絵劇とお店屋さんごっこに絞って準備を進めることとなった。第3回目には取り組み班のグループ分けを行った。

第4回目の授業時の講演は、T保育園の主任保育士による「T保育園生活発表会の取組み」をテーマにした講演であった。T保育園の実際の発表会記録映像を観ながら、普段の生活を保護者に見てもらおうスタイルの生活発表展について学んだ。

第5回から第10回は影絵劇とお店屋さんごっこへの準備、上演、反省を行った。

第11回から「保育科卒園式」の準備に入り第14回に開催した

第15回は〈学び〉のまとめを行った。

実際の授業内容は下表のとおりである。

授業回	授業内容
1	オリエンテーション、生活発表会をる（ビデオによる学び）
2・3	影絵遊び、グループ分け
4	生活発表会を知る（外部講師〈現場保育士〉による講演）
5～7	影絵劇を作る（シナリオ、小道具、稽古）／お店屋さんごっこ（商品作り）
8	影絵劇リハーサル／お店屋さんごっこ（商品作り）
9	保育園児を迎えての「影絵劇」上演と「お店屋さんごっこ」あそび
10	影絵劇とお店屋さんごっこの反省会（ビデオ映像による）
11～13	「保育科卒園式」を企画・準備する（壁面装飾、招待状作成、ピアノ練習）
14	「保育科卒園式」を挙げる
15	ワークシートによる〈学び〉の振り返り・教員による授業省察

以下、「影絵劇とお店屋さんごっこ」と「保育科卒園式」の授業展開を記録する。

①「影絵劇とお店屋さんごっこ」への取り組み（第2回から第10回）

i) 「影絵劇とお店屋さんごっこ」の課題の設定と準備進行（第2回～第8回）

第9回目の授業時に近隣のM保育園から約60名の園児が参加してくれることになり、「子どもの表現を引き出し育てる具体的な援助」について、模擬的にではなく、実地に学ぶ機会が持てることとなった。この時点で、ファッションショーは子どもが参加する企画が立てにくいということで、お店屋さんごっこに変更し、また、影絵劇では子どもが劇中に参加したり、あるいは子ども自身が影絵を楽しめるような要素をプログラムすることを新たな課題として学生は準備を進めた。ここに至って学生たちへ与えられる課題が、「第9回目の授業で開催する『影絵劇&お店屋さんごっこ』にM保育園から3, 4, 5歳児合わせて約60名が遊びに来ます。みんなで工夫を凝らして、子どもも参加して楽しめるよう準備すること」と明確になり、全体の学生を音楽班、影絵班、お店屋さん班に分け（各グループ約40名）、それぞれが準備にかかった。

影絵班ではシナリオ作りから始めて、影作りの練習、小道具の作成などに取り組んだ。お店屋さん班では、60名の子ども達が思う存分買い物を楽しめるように、品切れしないだけの商

品を作るという作業が始まった。音楽班は影絵劇でのBGMと効果音の役割を担うことになったが、影絵のシナリオができていこが始まるまで、効果音の出番はなく、無為の時間を過ごさざるを得なかった。またBGM演奏にしてもそれほど大人数の編成は不要で授業全体を通して音楽班の活動は十分ではなかった点に課題が残された。

影絵班では子どもが参加する企画として劇中にクイズの場面を設けて子どもにこたえてもらったり、登場人物がダンスを踊るシーンでは一緒に踊ってもらうよう声かけをするなどの工夫を行った。

お店屋さんごっこは、本来であれば商品作りも子ども達が行って遊ぶことが望まれるが、今回は1回のみ参加ということで、商品は学生が作らざるを得なかった。しかし、商品に少し手を加えることで完成させる余地を残すこと（たとえば、トイレトペーパーの芯で作ったパンと、色紙で作った具材を購入し、子どもが自分でホットドッグを完成させるなど）で、子どもが作る楽しさを味わえるような活動の工夫を行った。

音楽班は、影絵劇の効果音作りで様々な楽器や日用品で「木の枝が折れる音」や「ラクダが水を飲む音」等を表現する工夫を行った。

これらの工夫や準備の段階が、協働性の学びにとって重要な機会であった。クラスを超えてのグループ編成となったため、活動のはじめには動きが悪く、学生にとっても教員にとっても我慢を強いられる時間が多かった。「実際に子ども達が来てくれる」という事実が、学生たちに、最後まで努力することをやめさせなかった。次章で詳しく述べるが、このことが学生の学びにとって大きな役割を果たしたといえる。

ii) 「影絵劇とお店屋さんごっこ」：発表当日（第9回）

影絵班の学生たちは、事前に懸念されることとして、影絵のために照明を消して室内が暗くなることで子ども達が怖がって劇に集中できないのではないかとことをあげていた。しかし、始まってみると初めて見る影絵劇への興味が勝ったようで、身を乗り出して劇を見ている様子が印象的であった。リハーサルの段階では音楽班と影絵班の音合わせに不安が残ったのだが、本番では一つのミスもなく無事に劇を演じることができた。

約30分の影絵が終わると照明をつけて明るくなった体育館で、今度はお店屋さんごっこの活動が行われた。

お店屋さんごっこでは、当初子どもたち自身が学内の雑木林で落ち葉拾いをして、それをお金に見立てて買い物ごっこを楽しむという計画であったが、雨のため変更を余儀なくされた。あらかじめ拾っておいた落ち葉を袋に入れて子ども達に配り、お店屋さんごっこが始まった。体育館の舞台の前に40名のお店屋さんごっこ班の学生が、2、3名のグループに分かれて「ホットドッグ屋さん」「万華鏡屋さん」「ドレス屋さん」「写真館屋さん」などのお店を構えている。子どもは思い思いに落ち葉のお金を使って買い物を楽しんだ。出番の終わった影絵班と音楽班の学生は、子ども達に寄り添って買い物ごっこの援助を行った。

朝10時に大学に着いた子どもたちだったが、午後2時までたっぷり大学での活動を楽しみ、大型バスにゆられて帰って行った。子ども達の参加は、保育表現にかかわるリアルな体験を学

生に与えてくれた。

iii) 反省会 (第10回)

実施の翌週、当日のビデオ映像を見ながら反省会を行った。その時のワークシートの記述から、卒業、就職を間近に控えて、自分たちの企画で子どもたちと交わったことは、学生に多くの学びをもたらしたことがうかがわれた。

②「保育科卒園式」の取り組み

i) 「保育科卒園式」企画・準備 (第11回～第13回)

影絵劇とお店屋さんごっこ終了後、担当教員の発案で「保育科卒園式」を授業14回目に挙行することになり、企画、準備、当日の実施をすべて学生が担当することとなった。ここでの特徴は、保育所や幼稚園での卒園式で大事にすべきことを、子どもの立場、保育者の立場、保護者の立場から理解することであった。従って、学生の打ち上げ的な式ではなく、あくまでも保育現場の卒園式を想定することを求めた課題設定を行った。

企画班 (全体の計画立案、招待者の選定など)、製作班 (壁面装飾や案内状などの製作)、音楽班 (歌の選定とピアノ伴奏)、出し物班 (写真、ビデオ映像の制作・上映など) に分かれて準備を進めた。最後の定期試験前の忙しい時期であったが、学生たちは自分たちの卒園式ということで、嬉々として準備に携わっている様子が見られた。

ii) 「保育科卒園式」当日 (第14回)

本番では、2年間で世話になった事務職員を来賓でお招きするなど、本格的な式次第で進行が行われた。また在園児という立場で有志の1年生 (約40名) が参加し、卒園児 (2年生) を送る歌を歌った。式中の歌の伴奏もすべて学生のピアノ演奏で行われ、壁面装飾にも工夫が凝らされていて、保育学生として学修したものを遺憾なく発揮した、学生時代の総決算というにふさわしい取組みとなった。

3. ワークシートに見る学生の学び

すべての取組みが終わった後、15回目の授業時にこの授業での学びを振り返るまとめのワークシートを書かせた。設問は以下の4つである。

- ①この授業で行った活動を通じてあなたが学んだと思うことはどのようなことですか？
技術的なこと、グループ活動についてなど自由に書いて下さい。
- ②この授業で改善した方が良くと思うことは何ですか？また、こんなこともしてみたかったと思うことがあれば書いて下さい。
- ③今回学んだことは、保育現場での子どもの援助や保育活動にどのように活かせると思いますか？
- ④授業を終えての感想を自由に書いて下さい。

問①③④の自由記述回答から、学生自身がこの授業でどのようなことを「学んだ」と自覚しているかを抽出することとした。作業手順は以下の通りである。

- i) それぞれの問いに対する自由記述の回答から、学び・成長にかかわる記述文（523文）を抜き出して一覧に整理した。
- ii) 3名の授業担当者が別々に、「何を学んだとしているか」という観点で、一覧表を見ながら学生の記述を分類しカテゴリー化した。
- iii) 3名が別々に作成したカテゴリーを付き合わせ、内容を検討した結果、最終的に今回の授業での学生の「学び」は、4つのカテゴリー：（1）新しい表現技術、（2）子ども理解・援助に関する学び、（3）協働性にかかわる学び、（4）人間的な成長への気付き、に分類できた。

以下に学生の記述を示しながら、それぞれの学びを授業活動と関連付けながら説明する。なお、学生の記述は□内に【 】で示すこととする。

（1）新しい表現技術にかかわる学び

「影絵劇」「お店屋さんごっこ」「卒園式」が初めて経験する活動であったため、それぞれに新しい技術を学ぶ機会があった。新しい表現方法や技術の学びは、現場での保育表現の幅を広げるうえで役に立つものと考えられる。

【生活の音を違うものでたとえるのはすごく難しかった】

【音楽班では、子どもがわくわくするような、一緒に楽しめるような音楽づくりとはどのようなものか、学んだし、生活をとりまくあらゆる道具でいろんな音を表現できる面白さを学んだ】

【子どもたちが喜んでいたらおもちゃを実際に設定保育の中で作ってみたり、衣装や帽子に関しては、保護者参観で親子で一緒に作っても楽しいのではないかと思った】

【限られた時間の中でどれだけ効率よく作るかというような現場に出て必要な力を経験することができました】

【影絵では身ひとつ、または身近なもの、例えば服などを利用したり、光へ近いか遠いかを利用したりすることで様々な表現ができることを知りました】

（2）子ども理解・援助に関する学び

影絵とお店屋さんごっこでは、実際に子どもが来ることを想定しての取組みになったので、よりリアルに「子どもが楽しめること」へ配慮した企画や準備作業になった。異年齢の子ども達がやってくることから、影絵劇に対する理解度について学生同士で話し合い頭を悩ませる場面があった。実習やこれまでの学修などを通じて、学生たちは子どもについて一定の知識を蓄積しており、そのことが「知っているが故の難しさ」を学生にもたらしたといえる。同時にそ

のことが、保育表現における援助に子ども理解が重要であることの気付きをもたらしたようである。さらに、自分たちが主体的に取り組んで成功した今回の経験が、子ども達の表現したい気持ちを受容し、子どもの主体的な表現を大事にする援助への気付きを促している。

- 【実際に子どもたちに来てもらって見てもらうことで、本当の子どもの反応だったりが見られると思うので、こういうのが好きなかと勉強になることばかりだった】
- 【実際に子どもが来てくれて遊ぶことができたので、援助の仕方も学ぶことができました】
- 【お店屋さんごっこでは子どもたちの欲しいもの（買いたいもの）がそれぞれ違って、…中略…その違いが、子どもたちの個性であり表現であるので、その一つ一つを大切にすべきなのではと感じた】
- 【今回の授業では自分の意見を出す場が多く、その意見を基にして自分たちでさまざまなものを作り上げてきた。保育現場でも先生が作っていくのではなく、子どもたちを中心に、いろいろなものを作り上げてほしいと思う】
- 【遊びを一から指示するのではなく、子どもが自分で発想し、自分だけの遊び、工夫した遊びに変化させていくことも楽しいと思う】

これとは別に、グループワークの難しさやそれを乗り越えて行事を成功させた時の喜びを多くの学生が実感しており、そこから、子どもの協同性発達の援助について気づきを引き出している記述も多く見られた。

- 【この授業で「協力すること」を改めて学んだので、保育者になったら、子どもたちに「協力することの大切さ」をしっかりと伝えることができると思います】
- 【授業で学んだ、みんなで協力して考えて活動するというのを保育活動に活かせると思いました】
- 【子どもたちが協力し合うことをねらいに、保育できそうです】
- 【ひとりだけで考えるのではなく、お互い意見を出して、いろんな意見を聞きあうことで相手を受け入れながら協力して作っていく力も活かしていけると思います】

これらの記述に見られるように、単に自分の学びとしてのみ「協同性」を捉えることを超えて、保育援助としての「協同性援助」に眼差しを伸ばしていることは、授業担当者の思惑を超えて、学生たち自身が保育者へと成長しつつあることを示していると言えるのではないだろうか。

(3) 協働性にかかわる学び

今回の授業では、取り組みたい活動について学生の希望に沿う形でグループ編成を行った。同じ興味をもった者同士の活動では、各自やりたいことがはっきりしている分、お互いの意見を受け入れながら、それらをまとめ上げる難しさもあったようである。協働の困難さに言及した記述が多く見られた。

しかし一方で、話し合いや意見の調整を経て、それぞれの活動を成功させた達成感から、自分の意見を述べたり他者の意見を聞くことの大切さや、他者をやさしく受け入れること、集団

における個々の役割の重要性など、協働性の基礎を学んだと思われる記述も多く見られた。

- 【みんなで協力してよいものにしていくためには、すごく難しい事、大変なことがいっぱいあってしんどい思いをするかもしれないけど、それをのりこえると楽しさ、嬉しさ、感動など、良いことがたくさんあるということを学べた】
- 【完成したものを子どもたちに楽しんで満足してもらえるようなものを作れた達成感ものすごく気持ちの良いものだったけど、それまでの過程に意味があるということをしごく感じた】
- 【就職した保育園でも、保育士同士で意見を相談し合ったり、時には先輩保育士との意見の違いがあるかもしれない。でも素直な心で受け入れ、聞いたり、それに意見を付け加えたりすることで、最高の形が作れることをこの授業で学んだ】
- 【一つの大きな行事を保育科の誰一人欠けることのないように、1人1人がとても大切な役割を担って、自分の存在価値も1人1人感じる事ができたと思います】
- 【この授業から相手を思う気持ちや話を聞くなど、改めて学び直すことで、保育現場に活かせることが多く、社会に出たときに自分の糧になることをもう一度確認することができました】

(4) 人間的な成長への気付き

今回の活動を通じて、自らの人間的な成長に気付いたとする記述がみられた。保育科での様々な経験を通じて入学時にはなかった人間力が身に就いたことで、自らの成長を実感している学生の姿である。

- 【卒園式では話し合いの時に2年間通っていながら始めて話した人もいたりしました。でもそんな子とも普通に話せるのは今までの授業でいろんな人と関わってきたからだと思いました。入学当初の私では考えられないことでした】
- 【誰とでもいっしょに協力し活動し合えるようになったことが、今の私の一番の強みなのではないかと思います】
- 【私は大人数の前で意見をいうことが怖かったのですが、保育科の授業で鍛えられ少しずつ発言できるようになりました】
- 【自分自身、1年生の頃と比べて積極的に物事に取り組むことができたと感じている。影絵芝居では犬のポチをしたいと自分から手を上げたし、お店屋さんごっこでは積極的に子どもたちに話しかけることもできた。卒園式では企画班に入り自分の意見を言ったり、歌詞を考えたりと積極的な取り組みができたと感じた。この取り組みの中でさらに友人も増え、関係も深めることができたと思う。この授業を終えて、技術的な面だけでなく、物事に対する取り組み方も成長できたと思う】

4. おわりに

以上、新設科目「保育内容・表現（総合）」の授業における学生の学びを、ワークシートの記述によって確認した。影絵劇やお店屋さんごっこ、楽器やその他の日用品を使っただけの効果音の作成など、学生は未知の活動に果敢にチャレンジした。保育科への入学以来蓄積してきた知識や技術を駆使しながらこれらの課題に取り組むことで、それぞれが自分なりの成長や学びを実感していることが伺える結果となった。卒業後、学生たちがそれぞれの職場でこの「学び」を育てていける素地は持たすことができたのではないだろうか。その点では、今回の授業取組は一定の成果があったものと捉えても良いであろう。

しかし、本来授業やカリキュラムの評価は、それらが目指す目的や目標に対してどのような効果があったかという観点でなされるべきであろう。学生の感想・記述のみで授業評価を行った本稿は、授業・カリキュラム評価という点では不十分であることは否めない。

また、影絵劇ではどちらかというに見せることに重きを置いた取組に終始し、子どもの遊びたい（影絵をしてみたい）欲求を満たせなかったという担当教員自身の反省から、「子どもの表現を引き出したり支えたりする保育者のあり方を学ぶ」というこの科目の目的の点でも、課題が残されたといわざるを得ない。

以上の反省を踏まえ、次年度の授業では、学生たちが科目の目的を十分に意識しつつ取り組めるよう、授業の組み立てを考えるとともに、客観的な授業評価をどのようにするかにも目配りしつつ、授業計画を立てる必要があるであろう。今後の課題としたい。

参考文献・資料

- 厚生労働省「厚生労働省雇用機会均等・児童家庭局長通知」雇児発0722第5号 平成22年7月22号
厚生労働省（2010）「保育士養成課程等の改正について（中間まとめ）」
四天王寺大学短期大学部保育科（2012）「平成23年度『保育実践演習』研究報告書」